

踏み跡 < My mountains >

| | | |
|-----|------------------------|--------|
| 奥秩父 | 甲武信・国師・金峰(千曲川林道から昇仙峡へ) | No.053 |
|-----|------------------------|--------|

七月に国師ヶ岳に登った時と同じく、秩父の稜線を北から南へ越える旅を考えついた。千曲川源流の梓山から四時間半で甲武信岳に到達できる千曲川林道を使うことにした。そして、下山路は、昇仙峡へ一日がかりの下り。おそらく奥秩父でこういうコースを取る人は多くはないだろう。特に金峰山から昇仙峡へ下るコースは静かに違いない。前回の富士登山で、ピッケル、アイゼンワークの基礎を身につけたので、まずはおさらいをしようという考えである。生半可な冬山技術で、冬山未経験の吉野を連れ出したりしたのは、おこがましき行為だったかもしれないが、結果的に彼もこれをきっかけに冬山に入っていくことになった。

昭和40年11月27日

いつもの最終列車長野行で出発。

昭和40年11月28日(快晴)

小淵沢で乗り換える小海線ももう顔なじみになった。じっくり車窓の朝景色を楽しむ。小淵沢駅から大泉、小泉、清里、野辺山と標高が上るにつれて、車窓の甲斐駒を中心とした南アルプスの新雪の峰々は、モルゲンロートに輝く姿を押し付けてくる。

線路端の雑木林は茶色の枯葉に白い霜を付けて、朝の寒さが目でも感じられる。

このハヶ岳、奥秩父、南アルプスと眼底を圧するが如き景観は、「秋から冬にかけての小海線の一番列車」でなければ味わうことができないものだ。

最高の標高点である野辺山を過ぎて高原を滑るように下ると梓山への入口である信濃川上駅に到着。

梓山着は8時。もう霜柱の一部が光りながら崩れ始める時刻だが、海拔1300mを越えるここは、11月も終わりになると朝は寒い。

戦場ヶ原の蔬菜畑の中を歩き、毛木場平9時。(右写真)

空が広がるような河幅だった千曲川源流も徐々に幅が狭くなり、東沢出合い辺りまで来ると谷に入った感じになってくる。三宝沢出合いを過ぎて西沢に入ると段々に薄暗い林の中へ入り、やがて沢の流れも小さくなる。11時30分、手頃な座り場所を見つけて昼食。12時25分迄ゆっくり休養を取り、最後のツメに備えた。海拔2000m地点を過ぎると原生林の中のやや急な登りになる。原生林を抜け出して、視界が開けて、行く手に白い稜線が見えてくると、もう気ばかりあせてくる。沢沿いの平坦に近い道が続いた後だからだろうか、稜線への最後の急登が随分長く感じられた。膝を隠すほどの雪の斜面をフーフー言いながら登りつき、ようやく主稜線上に飛び出した時の慰めは、上半身を白く染めた富士の霊峰。時計を見ると14時を過ぎたところ、途中での休憩と食事の時間を差し引くと、正味5時間の行程だったことになる。やはり、多少であれ雪があるのとないのとでは違うようだ。

14時10分、誰もいない甲武信岳を越えて甲武信小屋に14時25分に到着。小屋では管理人の爺さん(千島さん)がひとり、ストーブの横で酒を飲んでいる。よく見ると、「HERMES GIN」と書いた瓶からグラスに注いで飲んでいる。

「何ちゅう酒か知らんが強い酒だ」なんて言っている。なんでも甲武信が好きで何度も来る若者が土産に持ってきてくれたんだそうだ。千島さんが酒を飲みながら遠くを眺めている姿を見ていたら、ピカソの「アプサンを飲む女」という絵を思い出した。シーズンオフの小屋は静寂そのもの、夏のうっとうしいほどの人間の臭いを今や想像することもできない。ひとりで酒を飲んでのんびりしたくなるのもわかるような気がする。



踏み跡 < My mountains >



我々として今宵は静かな三人だけの山小屋で、都会の喧騒を忘れて、のんびりしようというわけだ。

昭和40年11月29日(薄曇り)

太陽が見られない肌寒い朝、5時20分起床、朝食をとり6時半に出発。6時50分、再度甲武信岳山頂を踏んで10分の小休止。道標は国師へ6時間と示している。稜線を西へ進み、富士見台に9時。長い退屈な稜線も晴れていれば富士の華麗な容姿が一時も休みことなく目に入ってくる筈なのだが…。

夏の暑い日に汗をたらして下った国師への道も、今はじっとしていると寒い。わずかずつ登ってはいるものの、地図に見るとおりの長い尾根だ。途中で東梓で昼食をとり、懐かしき国師ヶ岳の頂上に着いたのは、もう闘志も執念も消え始めようという13時。

思い出してみても国師ヶ岳の頂上がにぎやかだったことはない。昭和38年の夏は止むを得ずセルフタイマーで写真を撮った。今年の夏、岩屋林道を登ってきたときも、何も見えない冴えない頂上だった。そして今日も今日とて、静寂な頂上で何よりである。

大弛小屋着は14時、管理人も下ってしまって、まったく人間の臭いがしない。我ら二人のほかに誰もいない。ストーブで薪を燃やすと、殺伐とした小屋の天井(屋根裏)が怪しく揺れ、思わずギクリとさせられる。炎の明かりの中に、棚の上のサントリーの角瓶を発見。ポケットピン一本分ぐらい残っている。一応臭いをかいて確認。「思わず見つけた酒少々、こいつあ冬から縁起がいいやあー♪♪」

とまあ一杯、また一杯、ほとんど一人で片付けたところ、酔いはしないが、体が温まって寒さの忍び込みなど感じなくなった。これで今夜は熟睡できそうな気が…。

昭和40年11月30日(曇り)

夜中に寒くて目が覚めた。それもその筈、アルコールで体が温かいのでシュラフのファスナーを半開のまま眠ってしまった。アルコールの効果が消えた頃がちょうど一番寒い丑三つ時。のどが痛い、風邪をひいたようだ。冬の寝冷えなんてあまり聞いたことがない。

6時20分出発、まず金峰山へ二時間の登り

金峰山8時20分。頂上は2599m、膝を没する程度の雪と、北西からの冷たい風。南アルプス、富士山、予想していた通りの景観で、特にあらたまった感激は出てこない。周囲は雪に埋まって植物は殆ど見えないし、動物の姿も何も見えない。生ある物の姿が見えるのと見えないのとでは、景色の存在感が随分違うものだ。

(右写真:金峰山頂上)



「昇仙峡へ8時間」と立て札が示している。五丈岩の直下、風を避けた岩陰で軽い食事と休憩の後、9時20分に昇仙峡を目指して下山開始。雪のとけた南面はところどころに雪解け水が凍りついた岩があり、余所見でもしようものなら、ツルリとやられてしまう。

振り返ると、ハイマツの彼方にポツンと五丈岩が見られるようになり、御室川の谷。ここはもう1880mになる。10時35分に御室小屋に到着。15分の休憩の後右岸の尾根に取り付き水晶峠に11時07分。ここからゆるやかな下りになり、手頃な場所を見つけて11時30分に昼食。

蛇のようにうねる荒川の谷を避けるように小尾根を越えることを繰り返しながら少しずつ下って行く。

黒平(1100m)、猫坂(1099m)、しばらくドロンコの中を歩き、15時25分に昇仙峡の金桜神社前に到着。

踏み跡 < My mountains >

ここは海拔 827m、7時間で 1700m以上下ってきたことになる。靴は赤土の泥をたっぷり付けて、すっかり重くなってしまった。やはり「長い下り」だったし、誰も出会わない「静かなルート」だった。谷間の夕暮は早く、もうブルンとするような冷気が漂い始めていた。

りんごをかじり、牛乳を飲んでひといきついているところへ、甲府行のバスが来た。(バス代120円)

亀沢川を下り、敷島、湯村とバスは盆地に吸い込まれるように下って行き、初冬の甲斐路風景を車窓から心行くまで楽しませてくれる。

帰宅後に俳句歳時記を眺めていたら、今日見た景色にピッタリの一句が見つかった。

山帰来の枯葉吹かれぬ峠越す 紅々

以上



(修正・更新:2023年11月)